世界遺産情報誌 No.7

紀伊山地の霊場と参詣道

三重県　奈良県　和歌山県

Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range

祈りのかたち「経塚」

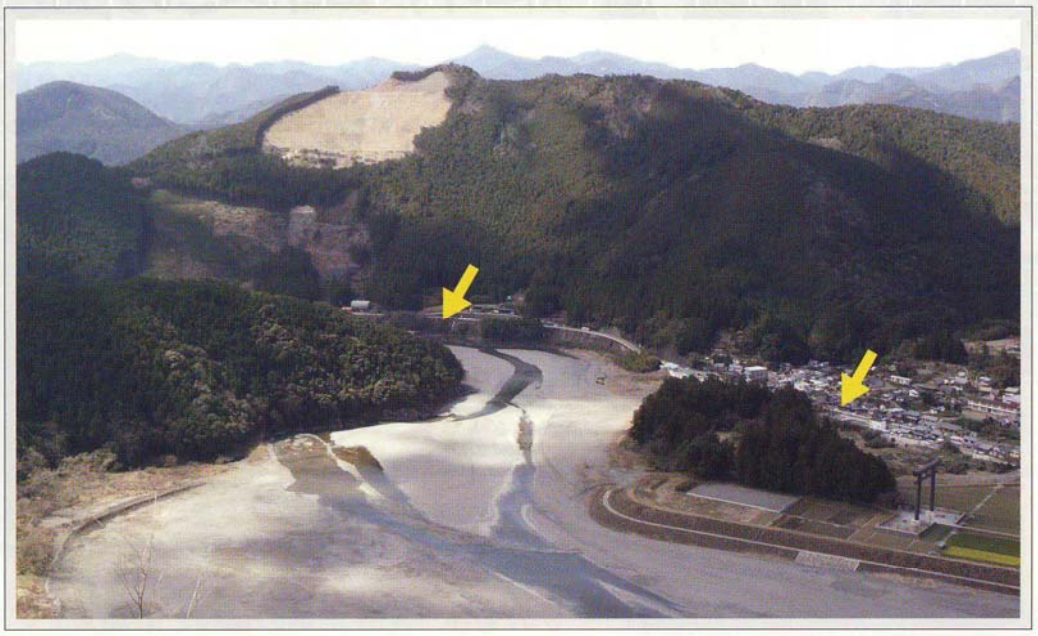
那智山経塚の銘文入り経筒

熊野那智大社蔵　写真提供：和歌山県立博物館

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されている神社やお寺、参詣道の周辺には多くの経塚が築かれています。経塚とはその名前が示すように、地面や岩かげなどにお経を埋めたもので、塚状に石や土で盛り上げたものもあります。さて、昔の人たちはどのような思いで経塚を造ったのでしょう。

日本で最古と言われている経塚を造ったのは「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」という和歌で有名な当時の左大臣藤原道長でした。道長は今から約1000年ほど前の寛弘4年（1007）に自分で書き写した紺紙金字のお経を光り輝く金銅経筒に入れて、奈良県吉野山の金峰山（現在の山上ケ岳）に登山して埋めたのです。平安時代の貴族にとっては、御嶽詣（金峰山参詣）は重要な宗教行事の一つで、一生に一度は金峰山登山をこころざしたのでした。江戸時代の元禄4年（1691）にこの道長が埋めた経筒が発見され、現在では国宝に指定されています。この経筒には五百字余りの祈願文がきざみこまれており、道長がお経にこめた祈りのようすがよく分ります。道長が書いた日記である「御堂関白記」（国宝）にもこの時のようすが日時を追って書かれています。ところで、山上ケ岳の標高は1719ｍで、大変けわしい山道を、登山靴も無く、わらじをはいて一歩一歩登っていく道長一行の姿が想像されます。この翌年、道長の娘の彰子に一条天皇の皇子（後一条天皇）がさずかり、世間の人々は金峰山の御霊験はあらたかだとうわさしたと記録されています。

仏教の教典を書き写す写経は国家仏教が中心であった奈良時代には官営事業として行われていましたが、平安時代には浄土思想が普及し、個人的な祈願成就を目的に行われるようになり



熊野本宮大社旧社地大斎原（右側）と備崎（左側）

ました。平安時代中頃には永承7年（1052）に末法の世が訪れるという末法思想が人々の間で信じられるようになり、その時期が近づくと経典が消滅すると考えられ、それを埋めて後世に残そうとしました。

後に関白ともなった道長の行為は全国に広がり、各地で経塚が造られました。和歌山県では高野山の奥院や熊野三山である熊野本宮大社、熊野那智大社、熊野速玉大社の周辺で多数の経塚が発見されています。

熊野本宮大社旧社地大斎原の熊野川の対岸には備崎と呼ばれている丘陵が延びています。この北側斜面には河原石を積み上げた数多くの経塚が存在し、発掘調査されて、整備されています。鏡や仏像、中国製の磁器類などが出土しました。付近からは江戸時代に国内最大、直径約41cmもある陶器の経筒外容器が出土しています。

熊野那智大社では那智大滝の周辺で多くの経塚が発見されています。滝へ下りていく参道の両側には石を四角く組んだ経塚や丸く盛り土をした経塚などが発見されています。また、涸れ池と呼ばれていた北側の斜面と平坦地からは巨石のすき間や穴に経筒や仏像、仏具、鏡などを納めたものが発見されています。

熊野速玉大社では背後の権現山でまとまって経塚が発見されています。また、勇壮な火祭りである熊野御燈祭が行われる神倉神社の巨石ゴトビキ岩の間からも弥生時代の銅鐸とともに経塚が発見されています。

経筒に名前を刻まれた人々は京都や奈良の人だけでなく、関東地方や長野や岐阜の人もいます。法華経などを写経して経筒に納め、鏡や仏像などを用意して、人々は熊野の聖地をめざし、長い道中をどのような思いで旅して来たのでしょう。かれらの祈りのかたちが、築かれた経塚や立派な出土品からしのばれます。

地球環境に配慮した紙と大豆油インキを使用しています。PRINTED WITH SOY INK